

労働者政治委員会

(仮称)

行動綱領

(草案)

全国のあらゆる工場・学園・戦線に
「武装せる革命の伝導路」＝
「労政」を建設せよ！

— 目 次 —

第一章	前 文	1
第二章	政治的任務	2
第三章	労働組合内での任務	5
第四章	労働貴族および社会帝国主義 支配下の労働組合内での任務	6
第五章	学生運動内部における任務	7
第六章	組織とその運動の防衛に 関する任務	8

第一章 前文

1. 階級と国家

今我々が生きている日本という国は資本主義の国である。資本主義社会を構成している基本的な階級は労働者階級と資本家階級である。資本家階級は生産手段を独占し、労働者を働かせて搾取する。労働者は資本家に労働力を売って搾取される以外に生きることのできない賃金奴隷である。

今日の社会には資本家階級と労働者階級のほかにわずかな生産手段を持ち、それに自分と家族の労働力を結びつけて働いている人がいる。農民や漁民、自営業者などがそれである。彼らは農(漁)民階級とか、小生産手段所有者階級とよばれている。しかし、資本主義の発展とともに彼らは次々と解体させられ、その大部分は労働者階級に変えられていったし、今も変えられ続けている。労働者階級はこの階級社会最後の階級であり、資本家階級との闘争を最後まで担いぬくことのできる唯一の階級である。

資本主義はその発展の中で資本家階級に富を、労働者階級に貧困を蓄積してきた。生産手段を独占している資本家階級への労働者階級の経済的隷属があらゆる形の隷属、あらゆる社会的悲惨、精神的退化、政治的従属の根底にある。資本家階級は、この経済的独占を維持し、永続させるために政治権力を利用しているのである。国家、官僚、警察、監獄、軍隊は資本家階級が労働者階級を支配するための道具である。

労働者は搾取に反対する闘いを、最初、雇い主にもっと賃金をよこせ、と言って始める。しかし、すぐに彼は雇い主が資本家というものであること、この資本家と労働者とは絶対的に利害が相入れず非和解的であること、資本家階級は国家を利用して労働者階級と被抑圧大衆を支配していることに気づく。日本はこのような資本家が政治権力をにぎるブルジョア独裁国家であり、労働者階級はこのブルジョア独裁国家を打倒しなければ解放はありえない。

2. 帝国主義の時代

資本主義は20世紀に入って全世界的に帝国主義の時代に入った。そして日

本資本主義も帝国主義の時代に入っている。帝国主義とは、①独占資本主義②寄生的な、または腐朽しつつある資本主義 ③死滅しつつある資本主義である。

第一に、帝国主義は巨大な独占を生み出した。これは生産を集中して、計画的に系統的になすという点ではもはやこれ以上の前進がありえないところまで到達し、社会主義へ移行する経済的条件を成熟させた。第二に、独占資本主義は資本主義のあらゆる矛盾を激化させる。帝国主義は労働者階級、被抑圧大衆、植民地人民への搾取、収奪、反動を強め民族的抑圧、併合をおしすすめる。第三に、帝国主義は超過利潤の一部で労働貴族を育成する。この労働貴族は、その生活様式、その稼ぎ高、その世界観の点でまったくブルジョア的なものである。これは労働運動における資本家階級の手先であり、資本家階級の労働手代であり、改良主義と排外主義の先導者である。第四に、生産手段の私的所有が存在する限り、そのような経済的基礎のうえでは帝国主義戦争は絶対に避けられない。帝国主義は世界を分割、再分割するために侵略・略奪・強盗戦争を引きおこし、全世界の労働者階級、被抑圧大衆に悲惨をもたらす。

労働者階級はこの帝国主義の時代にあつては、経済闘争を資本家階級の政治支配とのたたかいにしっかりと結びつけ、また、国際主義を掲げ、全世界の労働者階級人民と連帯しよう。

3. 過渡期世界

過渡期世界とは、ロシア革命の成立以降、帝国主義の時代でありながら全世界的なプロレタリア独裁への移行が開始された一時代であり、戦争と革命と国際党派闘争の時代である。

1917年、ロシアのプロレタリアートは社会主義革命に成功し、プロレタリア独裁政府を樹立した。この革命は全世界的なプロレタリアートの革命の勝利を展望する歴史的な号砲であった。しかし、そのことを知るヨーロッパ、日本、アメリカなどの帝国主義諸列強は革命ロシアに対する干渉を行い、

また、それら帝国主義足下階級闘争の未成熟故に、このロシア革命の勝利は一旦の孤立を強いられる。

スターリン主義はこの現状を「一國主義的」経済主義的に固定化した。社会帝国主義(社帝)はそれを路線化したスターリン主義から発展・転化したものである。社帝は、「平和共存、平和移行、全人民国家」の名のもとに全世界で湧きおこる階級闘争を分断、圧殺せんとしている。社帝は、新植民地主義支配のもとで湧きおこる民族解放闘争に孤立を強要し、またポーランドに示されたように、労働者国家においても湧きおこる階級闘争を自国の経済的権益のために弾圧している。これと一体のものとして先進国社帝は、日和見主義と排外主義を開花させ、自国帝国主義と政治的・経済的に完全にゆ着し、民族主義に転落している。われわれは、このような社帝と闘い民族解放闘争、労働者国家階級闘争内の反帝―社会主義へと向わんとする部分とこそ結合しよう。

4. 労働者階級

労働者階級とは資本主義のもとでは生産手段をもたず、資本家階級に労働力を売って搾取される以外に生きのびることができない賃金奴隷である。しかし労働者階級は搾取されるだけのみじめであれぬ階級ではない。この社会で労働者は労働し社会的富を生産している。資本主義の発展は大工場生産を大規模にうみ出し、労働者は多数の労働者と共同して働き、また、熟練工でなくとも生産をすることが可能となった。

労働者階級がいなければ、資本家階級は利潤を得られないばかりか、資本主義全体の機能がとまってしまう。ここに労働者階級が階級として団結しうる物質的基礎をもっているのである。歴史上、最後の階級として誕生した労働者階級は資本家階級と徹底して闘うことのできる唯一の階級なのである。

5. 労働者階級の歴史的任務

労働者階級は資本主義社会の中で、生きながらため、喰わんがために闘ってきた。労働者階級はこれら搾取に反対する闘いととも、権利闘争や反差別闘争などの民主主義闘争や、ときには反政府闘争を闘ってきた。それを労働組合―第一次団結体として闘ってきた。しかし、労働組合の闘いは部分的な

改良の成果を一時的にちとることはあっても、労働者を解放することはできず、労働者階級をしぼる資本家階級の鎖が太くなるばかりである。

労働者階級が賃金奴隷から解放されるためには、その第一歩として資本家階級が握っている国家を打倒し、労働者階級が国家を建設し、資本家階級を収奪しなければならない。そのために、労働者階級は資本家階級の暴力装置―国家・警察・軍隊を暴力的に打倒し、プロレタリア独裁政府を樹立し、階級の廃絶へとむかう共産主義を建設しなければならない。全ての労働者は、これを担いうる唯一の歴史的主体たる労働者階級へと自身を形成しなくてはならない。

6. 前衛党建設

労働者階級の歴史的任務である蜂起―プロレタリア独裁―共産主義を全世界的に実現するためには、全ての労働運動を組織する首尾一貫した主体としてプロレタリアートの階級の団結の最高形態たる党と自己を結びつけなくてはならない。党とプロレタリアート被抑圧大衆の結びつきは、党の指導により蜂起を準備する「武装せる革命の伝導路」として組織せねばならない。党は様々にはりめぐらした伝導路を通じて、政治的軍事的指導を貫徹し、蜂起を勝利にみちびくのである。「労政はそのような前衛党建設に準備しよう。」

第二章 政治的任務

すべての先進的プロレタリアートは、あらゆる工場・戦線・地区・学園で「武装せる革命の伝導路」―「労政」を建設し、プロレタリアートの政治闘争を組織せよ！

プロレタリア政治闘争の組織化とは何か？

被抑圧階級としてのプロレタリアートの最高の政治決起は武装蜂起であり、その最高の政治要求は、プロレタリアート独裁である。

プロレタリア政治闘争とは、これらを今日から準備していくことである。これらは、共産主義者のプロレタリア大衆に対する長期にわたる政治指導任務によってのみ実現する。

それは、現実の階級闘争とはいまだ距離があり、自然成長的には到達することのできないものである。

われわれは、現実の政治要求をとらえて、これを組織するとともに、そのたたかいの勝利と敗北の教訓をとらえて、資本主義批判と共産主義への確信を、獲得させなければならない。

1. 全人民政治闘争に決起し、プロレタリア政治要求を掲げて、自己とすべての被抑圧大衆を、プロレタリア政治闘争へと組織しよう！

プロレタリアートの第一次的たたかいたる経済闘争は、それ自身では資本主義を打倒することはできず、若干の改良をかちとることはあったとしても、そこにどまらばならぬ。ブルジョアジーの支配の鎖が太くなるばかりである。これを政治闘争と結合させ、発展させることが不可欠である。

さらにプロレタリアート、被抑圧大衆は、ブルジョアジーに分断され、その個別の利害から出てくる要求もまちまちで、運動の目的、組織、戦術も統一性をもちがたず分断されている。

プロレタリアートの個別経済要求は分散しており、経済要求そのものの政治化では決して統合されない。

それはプロレタリアートの政治要求の下でしか統合されない。「労政」は、プロレタリア政治要求を掲げ、プロレタリア大衆の分散する個別経済要求と運動を集中し、プロレタリア政治闘争へと前進させなければならない。

「労政」は、次の当面する政治運動基礎を掲げ、プロレタリア政治闘争を組織せねばならない。

これをもって「労政」は、全人民政治闘争と切りむすぶのである。それは、①プロレタリア政治要求のまわりに、動揺する諸階級層を集中させていき、全人民的政治決起を創り出すことであり、②現在の全人民政治闘争の中にプロレタリア政治要求を掲げて指導的に介入することである。この五つのスローガンは、上向的にはその際の手ずれない党派闘争基準として、下向的には分散するたたかいを統合していくスローガンとして、深化具体化されるべきものである。

- (1) 帝国主義・社会帝国主義の侵略反革命戦争に反対しよう！
- (2) 全世界の民族解放闘争・民族解放―社会主義勢力と連帯しよう！
- (3) 自国帝国主義―日帝の戦争とファシズム準備とたたかおう！
- (4) 労働運動の産業報国会とたたかい、階級的労働運動を構築しよう！
- (5) 社共―中間連合政府派の幻惑を暴露し、大衆を社共のくびきから解放しよう！

2. 政治闘争への決起を通じて自己を政治的前衛として武装し、政治闘争をゼロから組織する能力を身につけよう

「労政」は、全人民政治闘争への決起のみならず、右翼日和見主義の影響下にある大衆の中に入れ入り、必要とあらば社共との一定の共闘さえいとわず、その中で独自のプロレタリア政治闘争を組織し、彼らの影響下からプロレタリア大衆をうばいかえしていく能力を身につけなければならぬ。

このためには、この共闘をおして彼らの路線的本性を暴露し、われわれの側に組織する党と結びついた政治的前衛として、「労政」の政治的任務を果しうる右翼日和見主義批判・社共批判の武装・発展をちとらねばならぬ。

3. 大衆の政治決起の第一歩から社共および左右の日和見主義との分岐を打ちこみ、プロレタリア政治闘争への前進を組織しよう

「労政」は帝国主義との闘争と社会帝国主義—右翼日和見主義との闘争を不可分に結びつけなければならない。

今日の帝国主義の時代においてブルジョアジーは超然利潤を得て、プロレタリアートの個々の層を極めて少数にすぎないが買収して、このプロレタリアートの上層を残りのすべての労働者に対抗してブルジョアジーの側に引きつける。

そして世界の分割のための帝国内争の激化は、これらの労働貴族とブルジョアジーの政治的結びつきを、帝国主義本国における排外主義としての巨大な政治勢力へとつくり上げていく。

こうして帝国主義と日和見主義—社会排外主義の結びつきがつくり出される。

「民社党・社共」

社共—社会帝国主義は、プロレタリアートの真の敵がブルジョアジーであることを認めず、労資協調を訴え、戦争の階級的な性格—ブルジョアジーの市場争奪戦であることをおおいかくし、民族の利益を擁護することを訴える。彼らは、プロレタリアートの利益を掲げることせず、階級を国民・民族

に解体し、プロレタリアートのたたかいかいをおしとどめる。

。民社党は、同盟を通じて労働運動支配と共に、日本帝国主義のプロレタリアートへの搾取と抑圧の強化—戦争体制作りの階級的尖兵としてある。その階級基盤は、はつきりと帝国主義ブルジョアジーである。

。社会党は、まだ階級内的部分としてあるものの、今日急速に社会主義の旗をおろし、プロレタリアート被抑圧大衆との結びつきを切りすて、大労組、労働貴族に基盤を置くブルジョア改良派へと転落するに至った。彼らは動揺する小市民を代表する。

。以上の二者とは区別されて日本共産党が存在する。彼らは革命を口にするしかし彼らは、レーニン主義のすべて、マルクス主義の戦闘的実践性を捨て、古典の意味におけるカウツキーに代表される社民党派へと理論上も実践上も転落した。

民社党は、労働運動の産報化と日帝の侵略戦争体制作りを支える排外主義であり、帝国主義ブルジョアジーの尖兵である。

社共は、そのあらわれ方はちがっても、日本民族の「民族自決」の名をかりて資本主義の救済・帝国主義の擁護を労働者人民に押しつける社会排外主義者である。

「労政」は、全世界の民族解放闘争に敵対し、侵略戦争へのプロレタリアートの動員を画策する民社党—社会党—共産党とたたかわなければならない。

「右翼日和見主義」

以上の民社党—社共に反対するかのようにつつプロレタリアートの前に登場する右翼日和見主義者とも、われわれはたたかわなければならない。

彼らの路線的本性は、プロレタリアートの団結をソビエトの団結におしとどめ、党の任務をソビエトの指導におとしこめ、レーニン主義前衛党建設に現実のプロレタリア大衆の闘いを結合していくことを否定するソビエト主義である。

彼らの革命とは、全産業でのプロレタリアートのゼネストでブルジョア政府を倒す、プロレタリアートの武装なしの平和ゼネスト革命路線であり、プ

ルジョアジーの暴力装置の前には無力であり社共の後ろからファシズムへと合流していく以外に道はない。

彼らは総じて、プロレタリアートの自然発生性を右から固定し、政治的には、社共への大衆の不满を彼らとたたかうかのように見せかけながら社共に追いつかせていく社共の補完物である。

「急進民主主義」

また同時に、これらに主観的には反対し、暴動革命を対置する左の日和見主義者としての急進民主主義者が存在する。

しかし彼らの革命路線たる、ゲリラ、戦闘団路線、および暴動革命路線とは、社共・右翼日和見主義との闘いを通じてプロレタリアートを社会主義革命の担い手、まねばりつよく獲得していくことを否定し、動揺する階級層の

自然発生的な戦闘性に一面的に拝跪するもの以外ではない。われわれは、これらの部分とも、自己をはっきりと区別していかなばならない。

4. 自らを革命的プロレタリアートとして建設するために、社会主義のための意識的な理論的・思想的武装をしよう

ここで言う社会主義のための理論的・思想的武装とは、政治闘争の組織化の中で自動的に進むものではない。

自己を共産主義者として建設しつつけるという目的意識性につらぬかれた、意識的なマルクス・レーニン主義をめぐる学習を計画し、実現しなければならない。

第三章 労働組合内での任務

「労政」は労働者の階級としての意識と団結を形成・促進させるために、労働者の最初の団結体としての労働組合を建設し、共産主義の学校として指導しよう

1. 「労政」は、労働組合として経済闘争を組織し、資本との攻防の中で、階級形成の第一歩をおしすすめるよう

労働組合における経済闘争は、労働者自身の生きんがため、食わんがための必然的たたかいである。それ故に、多くの労働者を運動に引き入れ、資本家階級への第一歩的な抵抗に踏み出させ、労働者を団結させる基盤を作る。しかし労働者の経済闘争は、資本と資本家階級の支配から労働者階級を解放するものではない。経済闘争のみでは、賃金奴隷制そのものをなくす闘いへとつながらぬ。

「労政」は経済闘争を、労働者の資本による疲弊・摩耗を防ぎ、階級闘争に決起する条件をふやすという観点からおしすすめる。

したがって、その獲得目標を改良の成果の大小におくのではなく、経済闘争の勝利、敗北の総括をおして、労働者個々が、労働者階級の一日であり根本的利害を同じくすること、敵が資本家階級であり、彼らとは非和解であること、その闘いのために団結しなければならないことを不断に教え続け、この最初の階級形成をおしすすめるなければならない。

「労政」はこれに加えて、これらの経済闘争を通じて形成した団結を一企業、一産別、一地域の枠をこえおしひろげ、個別の資本家ではなく、資本家総体

どの闘いへとおしひろげていかなければならない。

そして、これらのたたかひの中で要求と団結の個性・分散性を突破し、できるだけ多くの労働者を参加させ、大衆的実力闘争としてたたかわしめ、階級意識を前進させていかなければならない。

このために、とりわけ官民分断をはねのけ、ぼう大なパート等を含めた未組織労働者を組織していく事業は重要である。

2. 「労政」は、被抑圧人民・被差別人民の諸民主主義闘争を支援し、労組をして諸民主主義闘争を担わせよう。そして諸民主主義闘争の中に、プロレタリア政治要求をもちこもう。

われわれをとりまく社会は、部落差別、在日朝鮮人差別、障害者差別など労働者人民を分断せんとする日帝の支配が貫徹されている。これらの差別分断支配は、労働者人民が真の階級的団結をつくりあげていくことを妨げるものである。「労政」は、労働組合という最初の労働者の団結体を企業内にとどめるのではなく、たたかひの団結を被抑圧人民にまでおしひろげ、労組と諸組織との共闘を形成することによって、労働者に加えられる組合主義、経済主義とたたかひ、階級的自覚を促進させていかなければならない。

この場合、もちろん、諸民主主義闘争もまた、被抑圧人民・被差別人民の階級的利益を要求するたたかひであり、それ自身は日帝への政策改良要求のたたかひである。それ故、それ自身においては、労働者人民の将来の階級利益のために団結させるたたかひにはならない。

また現に、日帝はたたかひの中に経済主義、改良主義を育成し、分断支配を更に打ち固めんと、不断に攻撃をかけてきている。

「労政」は、被抑圧人民・被差別人民の民主主義要求の最初の決起を、ここにとどめるのではなく、このたたかひを被抑圧人民の階級としての真の勝利にむかって団結させるべく、プロレタリア政治要求をもちこみ、プロレタリアの指導部を建設していかなくてはならない。

3. 「労政」は、労組内において労働者大衆の政治意識を発達させ、

第四章

労働貴族および社会帝国主義支配下の労働組合内での任務

労組内外をつらぬいて労働貴族の本性を暴露し、社共との党派闘争をおしすすめ、右翼日和見主義、社会帝国主義者を追放するたたかひを組織し、階級的指導部を建設しよう

1. 組合主義政治を打ち破り、大衆的なプロレタリア政治闘争を組織しよう

社共の組合主義的政治は、政治内容の反動性のみならず労働組合員の政治行動、政治要求を労働組合の枠内に強権的に封じこめんとするところに最も反階級の本質がある。「労政」はこれら社共の組合主義的政治と対決し労働貴族の支配と攻撃を打ち破り、労働組合内部からプロレタリア階級の政治要求をかかげる闘争を組織しようではないか。

2. 資本の首切り、合理化、労働強化の攻撃と闘い同時に、反動的労組指導部の統制をはねのけ資本に対する労働者の大衆的決起と団結を組織しよう

労働貴族の労資協調路線、実力闘争否定、代行主義を打ち破り、労働者の生きんがため、食わんがための経済闘争を資本との非妥協の闘争に労働大衆をむかわしめ、最初の労働者大衆自らの決起と団結を組織しようではないか。

3. 労組内外での「労政」の公然たる活動を大胆におしすすめ、権力労働貴族からわれわれの「労政」を防衛するための活動能力を獲得しよう

労働貴族の管理支配、組合統制の強化の中で、「労政」の運動を目的意識的に遂行、発展させるために非公然活動能力を獲得し身に付けなければならぬ。

より広い階級闘争の戦場へ政治闘争へと導く政治的衝動として武装しよう

第一次団結体とそのたたかひは、生きんがため、食わんがための個別的要求が個別の利害をかけた経済闘争として、資本家階級への抵抗の一步をふみだす。しかしこのたたかひの個性、分散性に対して、資本家階級は不断に労働者自身の利害対立、分断支配の攻撃をかけ、団結を弱めんとしている。また、経済闘争それ自身は、どこまでも利益の分配要求・改良要求の枠にあり、資本家階級の支配をなくすものではない。

ブルジョア階級からの解放のために、個々のプロレタリアの利害は、プロレタリア全体の階級の利益を実現する政治要求のもとに組織されねばならない。

このプロレタリア政治要求は、プロレタリアが国家権力をにぎり、敵階級ブルジョア階級を打倒し、社会主義建設へむかうこと、これにむけた革命的決起、及びこれへの到達を目的とした政治要求である。

これは、労働組合のたたかひの直接延長上にはなく、組合をこえた階級的戦場と組織によって担われる。労組はこれと結合した広大な基礎的戦場として組織せねばならない。

「労政」は、第一次団結体の最初の政治参加を促がし、政治意識を活性化、助長し、これらをプロレタリア政治要求と結びつけるよう、徹底した、かつ工夫した政治的宣伝・煽動・組織化を行なわねばならない。

即ち、この最初のプロレタリア大衆の政治決起を、組合をこえたより広い階級闘争の戦場へと導き、組合をこえた団結体——「労政」へと組織していかねばならない。

このために「労政」は、第一次団結体に存在する経済主義・組合主義・議会主義の部分との闘争を不可避とする。

「労政」は、以上のべたところの経済闘争の指導をつうじて、資本家階級に対する労働者階級の階級的団結を形成していくこと、及び経済闘争の決起を政治闘争の決起へと領導すること——これらの活動を担うことによって、第一次団結体を共産主義の学校として指導する任務を果しつつけねばならない。

同時に、労働貴族のとなえる企業主義、国益主義—排外主義イデオロギーと対決し、ブルジョア思想とたたかう思想的武装をかちとらうではないか。

4. 未組織労働者の労働組合結成の闘いを支援し、地域共闘をおしすすめ、階級的労働運動の強固な陣型を構築しよう

労働貴族の中で、労働組合活動の低下の中で企業産別の枠をこえ、先進的労働者を地域共闘建設の闘いに向わしめると共に、未組織労働者の第一次団結体を組織していくことは不可欠の任務である。そして、階級的労働運動の主体的陣型をつくる闘いに積極的に参加しよう。

第五章 学生運動内部における任務

学生大衆の深部に「労政」を建設し、学生内部に存在する階級的分岐をおし広げ、学生と
その闘いを先進的プロレタリアートの同盟軍として組織しよう

1. プロレタリア政治闘争・全人民的政治闘争を組織しよう

学生全体はブルジョワ階層の一部を構成している。自己の階層的利害の
個別性、限界性はプロレタリア政治要求と結合し、全人民的政治闘争の一翼
を担うことによって止揚されねばならない。そして、全人民的政治闘争を闘
うだけでなく、先進的プロレタリア階級と単一の部隊で独自のプロレタリア
政治闘争を組織していくことである。

2. プロレタリア世界観、人生観を獲得しよう。

学生は、資本の直接的搾取をうけているわけではなく、学生の自然成長的闘
争と団結の直接延長上にブルジョア階級との階級的非和解的対立へと至るわ
けではない。又、学生の階層的特徴は、浮動性、動よう性を根強く有してい
ることである。

学生にとってプロレタリア世界観、人生観とは、どのような時代において
も、自然成長的闘争の中からだけでは、これを獲得することはなかったし、
また、できない。

それは、唯一、資本主義批判と、社会主義への結果のための目的意識的実
践をおしてのみ可能である。

とりわけ「社会主義への絶望」の広はんな存在、思想的にもブルジョアジ
ーの奴隷にせんとする攻撃が強化されている今日にあっては、かつての時代と
異なり、その要求さえ自然成長的には生まれがたくされている。

さらに今日、学生運動を広くはんに支配している右翼日和見主義によって、
この事業は投げすてられている。

4. ファシズム学生運動・日共・右翼日和見主義学生運動と対決し、 学生内部の階級的分岐を大胆におしひろげよう

抬頭するファシズム学生運動との闘争は、学生運動にとって一個別課題で
はありえない。

それは、学生をブルジョアジエの側に組織するの、プロレタリアートの
側に組織するの、かをめぐる闘いとして発展させなければならない。

日共・右翼日和見主義学生運動は、この対立を「学生層固有の要求」という
幻想の中に溶解させ、もってファシズム学生運動の側への学生の組織化に道
をあけた部分である。

これらの部分と闘い、潜在する階級的分岐の萌芽を発展・成長させ、プロ
レタリアートの陣営へと組織しよう。

5. 自治会を始めとする、最初の闘いと団結を形成する広範な大衆 的組織と運動を創出、奪権しよう。学生内部の諸闘争サークルを

第六章 組織とその運動の防衛に関する任務

「労政」を、政治警察、資本の弾圧、日和見主義者の暴力的攻撃と闘い、自己の組織と運動
を防衛・発展できる組織に作り上げよう

1. 政治警察、資本や敵対者の日常的監視、介入、組織破壊攻撃か ら「労政」の組織を防衛しよう

資本がその本性からして自らの利益のためどのような手段を使っても資本
の利益を守ろうと敵対してくるのは自明の事だが、警察は、労働者階級を支
配するための資本家階級の弾圧機構である。

本質的に、労働者階級のあらゆる闘争は、現在の国家へブルジョア組織

それゆえ、共産主義者によってこそ、それは復権されなければならないの
である。

これら階級的労働運動との結合をばしめとした実践を通じ、またマルクス
レーニン主義の学習を通じて武装しよう。

従って、階級闘争の主体に前進するためには、労働者にもまして、思想的
にプロレタリア階級の一員へと形成することが必要なのである。

3. 階級的労働運動との結合をかちとろう

学生はもはや、ひとにぎりのインテリゲンツィアでなく、その大半が、得
来のプロレタリアートである。だがそれはプロレタリアート内部にうちこま
れる支配のくさびとして、「中間管理職」へと育成される現実にある。

同時に、学生は、資本による直接的搾取をうけているわけではなく、資本と
の非和解性を自己の生きがいの闘いの中からつかみとることのできない独
自の層である。

日帝の学生支配としてある「中間管理職」育成の攻撃と対決するとともに、
現実のプロレタリア階級の流動と分解への実践的態度を明確にし、自己を先
進的プロレタリアートの同盟軍へと変革すること——これを階級的労働運動
との結合として闘い、その中から学生をプロレタリア階級の一員へと形成し
ていこう。

そして、ばう大な未組織労働者の組織化をはじめとする事業に、先進的ア
ロレタリアートとともに参加しよう。

階級的に領導しよう。

学生の政治的・民主的諸権利を、はく奪しようとする学生支配の中で、最
も広はんな学生大衆を結集する組織を創出すること。又、右翼日和見主義の
支配からは、奪権してゆくこと。そうしなければ「労政」は学生の間で活動す
る手足を自らしぼり、大衆に対する自己の広はんな影響力を自ら失うことに
なる。

学生自治会をはじめ、学生の広範な大衆組織は、労働組合と異り第一次団
結体ではありえない。ただ、共産主義者の意識的活動によってのみ、階級形
成のための武器になるということである。

学生内部における、諸闘争サークルの闘争課題の個別利害への埋没と闘い、
階級闘争全体の活動家へと領導していこう。

家)に、敵対するものとして見なされており、警察は、ブルジョア独裁国家
の重要な暴力装置として、常に、このような運動と人々を監視している。「
公安」警察はその中心であり、彼らの活動は「国家に対して、その破壊、
んぶくを計る」者達に対しての監視、介入、壊滅を目的にしている。だから
我々はその活動と本質をとらえ「政治警察」と呼んでいる。また、法律(ブル
ジョア法)も本質的には支配階級のものであり、その運用は「公正・中立」を
装いつつ、労働者階級を攻撃し、ブルジョア階級を維持するものである。

だから我々はその「公正・中立」を信じてはならない。

「労政」は、労働組合をはじめ、あらゆる大衆闘争組織の内部にしっかりと根をはった、もっとも意識的で先進的な活動家の組織である。

だからその活動は、運動の現在の利益を達成するためにたたかうだけでなく、同時に運動の未来をも代表しようとする幅広い活動である。

これは、ブルジョア法に違反していようと、いまいと、大衆闘争の中心であるとともに、革命の組織たる「労政」が敵階級との関係において、本質的に非合法であることを不可避とする。

われわれは、これにみあう組織として「労政」を今日から武装していかねばならない。

「労政」の組織は、政治警察や資本に対して対立し、緊張している。だから政治警察や資本や敵対者は、この組織を破壊する事を常に狙っている。

この組織破壊攻撃は、敵の攻撃の中心環である。それは、日常的監視や介入、はては暴力的攻撃に至るまで中広いものである。

我々は労働者階級が闘うための唯一の武器——組織をこのあらゆる攻撃から守らねばならない。

2. 政治警察・資本・敵対者の暴力的攻撃の中でも、公然・合法領域を一步もあけたさず、「労政」の運動を防衛し、発展させよう

敵の組織破壊攻撃の中でも、「労政」は、それぞれの立脚する大衆団体の中で、運動を防衛し、発展させなければならない。

大衆闘争の中から身を引いて自己を防衛するのではなく、運動を発展させる事で、防衛せねばならない。

運動の防衛は、たとえ「労政」の一活動家に攻撃がかかったとしても、その攻撃の本質を明らかにし、運動の分断を許さず、全体にかけられた攻撃、運動の中心にかけられた攻撃である事を大衆に訴え、立ち上がらせる事でやらなくてはならない。又、組合活動等へ警察の介入があったり、資本や敵対者

の攻撃があっても、合法性を最大限利用しつつ全部の労働者への攻撃として全体で反撃する事を心がける。常に労働運動を狭い経済闘争へ押しこめる事で運動を発展させない事が、支配者階級の狙いだから、それを日常的に大衆に訴え、全体を押し込む攻撃として反撃する事で、「労政」の運動を防衛しよう。

3. 大衆を勇気づけ、はげます必要に際して、断固として自らの組織を武器に反撃できる準備をしよう

組織破壊攻撃や運動の破壊攻撃に際して、防衛すると同時に反撃できる準備をしておくはならない。それは、大衆が自己の闘争にかけられた攻撃に対して、敗北感を持ち、闘争の未来に絶望を持つ事がないように、大衆を勇気づけ、はげますような反撃を準備しなくてはならない事である。

組合活動に暴力的敵対（右翼ガードマン等）が起る場合、実力でも撃退する必要もある。それは、大衆を勇気づけ、闘争への確信をつけるために行う事である。権力の介入から自己の防衛を大衆的支持を背景にしてとりつつ、行う組織の準備と決意が必要である。それは、実力闘争のために、どういう部隊を作り、どのような行動が必要なのかを教え、たたかい方を指導する準備を「労政」がしてゆく事である。

また大衆がいなくても、「労政」だけの力で闘う準備もしなければならない。敵の監視をかくぐり、非公然に闘う独自の力をも身につける事である。そのような闘争の方法を日頃から学び準備してゆく事は反撃のための重要な活動である。

これからの事を通して、大衆を勇気づけ、はげまし、また実力でも闘う事の必要性もある事を教え、組織していく事は「労研」の重要な任務である。それは何よりも、「労政」自身が必要な時には合法性にとられない戦う力を持つ組織として、自己を準備してゆく事が必要である事である。

労働者政治委員会(仮)

行動綱領(草案)

1983年 月